

# 裏舞台 という名の 表舞台

多くの人たちによってつくられる舞台。  
主役のまわりに視線を転じてみると、  
至る所にプロの技が輝いている。  
舞台を支える人に光を当てる。

STAGE 13

## 舞台監督

Stage Manager

芳谷 研

Yoshitani Ken



Photo / Ko Hosokawa Text / Rie Shintani

「監督」とはチームをまとめ、指導し、引っ  
ぱって行く人のこと。ではそこに「舞台」  
が付くとどんな仕事になるのだろうか。劇  
団☆新感線や蜷川幸雄氏のもとで舞台監督  
(通称：舞監／ブカン)として活躍する芳  
谷研さんは、その仕事を「コミュニケーション」  
だと言う。

「演出家がやりたいことを具現化する、美  
術・照明・音響・衣裳……各プランナーと  
のやりとり、要は調整係、雑用係ですね(笑)。  
彼らのやりたいことを聞き、それができ  
るかどうか、どうすればできるのかを検  
証してまとめていくのが僕の仕事です」

芳谷さんが舞監の仕事を知ったのは18  
歳の頃。当時は飲食店でアルバイトをし  
ながら小劇団で役者を目指していた。

「小さな劇団だったので何でも自分たち  
でやらなければならない。役者以外にも  
こんな仕事があるのかと、そこで舞監とい  
う仕事を知りました。もともと役者志望でし

たが、劇団が2年で解散。その時の舞監さ  
んに、仕事がないなら手伝うかと誘って  
もらったのが始まりです」

その会社で演出部(舞台監督のもとで動  
くチーム)のひとりとして働き、24歳の時  
に元宝塚歌劇団の謝珠栄さんの踊りの発表  
会の舞監を任された。その後は主に外国人  
演出家の舞台を担当。経験を積んでいく。  
興味深いのは舞台監督の仕事は、こうい  
うものだルールがないことだ。

「僕には2人の師匠がいますが、こうしな  
くはならないという決まりはなく、仕  
事の中身もルールも人それぞれです。僕  
の場合は各部とのやりとりの他に役者のサ  
ポートもします。たとえば、外国人演出家  
が通訳をとおして各部に指示を出してい  
るとき、いま〇〇をしています、とマイク  
でアナウンスするのも僕の仕事です」

観察力と気づき、そして気遣いが必要不  
可欠な仕事だ。ひとつの舞台に関わるすべ

ての人を繋ぐのが舞監であり「この仕事は  
コミュニケーション」という表現は確かに  
的を射ている。

芳谷さんの大きな転機は1996年。赤坂  
BLITZで行われたプロデュース公演  
『D-LIVE～ロック・トゥ・ザ・フューチャー』  
で、いのうえひでのり氏と出会ったことだ。  
「当時はまだ会社員としてでしたが、それ  
がきっかけで1999年の『直撃!ドラゴン  
ロック2～轟天大逆転』の舞監として声か  
かり、その後のいのうえさんの作品はほ  
ぼやらせてもらっています。新感線の舞台  
は大きな劇場ばかり。舞監として経験の浅  
い30代の頃は、若いという理由でなめられ  
たくなくて必死でしたね」

思い出深いのは、いのうえさんと知り  
合った翌年に任された『阿修羅城の瞳』だ  
と言う。31歳の舞台監督にとって歴史ある  
新橋演舞場は「キツかったですね(苦笑)」  
とふり返る。

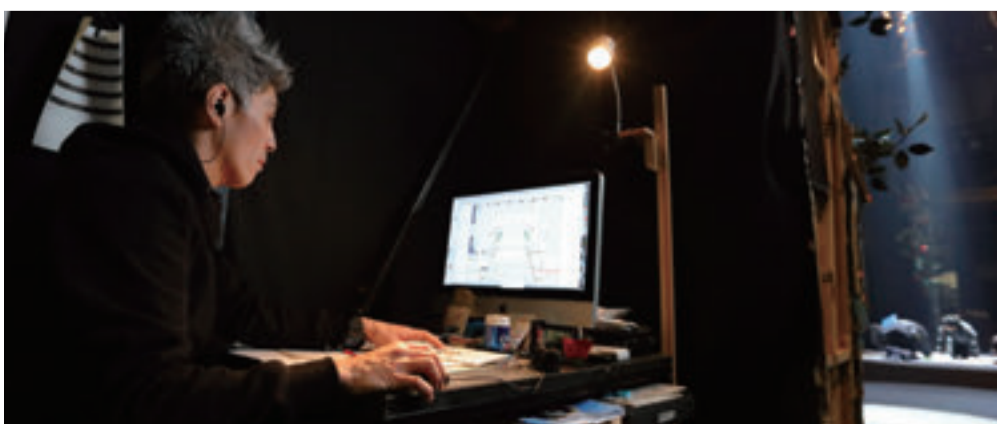
「大きな劇場になると劇場専属の大道具さ  
んもいるので、スタッフとキャストすべて  
含めると100人以上。まとめていくのは大  
変ですし、気を遣います。初めて演舞場  
で仕事をしたときに大道具の頭領さんに、あ  
んまり仕事をし過ぎるなよ、体壊すぞって  
言われたそのひと言がすごく嬉しくて。短  
い会話であっても会話があることでコミュ  
ニケーションが生まれる。その時、自分も  
彼のような先輩になりたい、自分が嬉しい

と思ったことは実行しようと思いました」

それから16年。今年Bunkamuraシア  
ターコクーン開幕公演、蜷川幸雄演出  
『元禄港歌-千年の恋の森-』に始まり、夏  
には劇団☆新感線『Vamp Bamboo Burn  
～ヴァン・パン・バーン～』が控える。そ  
んななか、新たな夢も抱いていると言う。

「本来の僕は一人っ子で暗い性格で、喧  
嘩っ早くて頑固。なので20代後半の頃、  
自分は舞台監督という仕事に向いていな  
いのではないかと迷ったことも。次の仕事(舞  
台)で辞めよう……と最後のつもりで必死  
で頑張ったら、逆に楽しくなってしまって  
今に至ります(苦笑)。それからは辞めたい  
と思ったことはないですね。野望もないで  
すけど。ただ、30年近く舞台の仕事が続け  
てきて、嬉しいことに、東京の大きな劇場  
のほとんどで仕事をさせてもらった。その  
経験は財産です。経験があるからこそ“こ  
んな劇場があったらいいな”と考えること  
もある。いつか劇場をひとつ作ってみたい、  
という夢はありますね」

PROFILE 芳谷 研(よしたに・けん)  
1968年生まれ。1992年に舞台監督デビュー。1996年に演出家  
いのうえひでのり氏と出会い、1999年に劇団☆新感線『直撃!ドラ  
ゴンロック2～轟天大逆転』の舞台監督を任される。その後、17年  
にわたり多くの劇団☆新感線の作品で舞台監督として活躍。  
2005年には蜷川幸雄演出『KITCHEN』の舞台監督に抜擢され、  
『オレスティス』(06)、『カリギュラ』(07)、『ファウストの悲劇』(10)、  
『下谷万年町物語』(12)、『皆既食』(14)、『元禄港歌-千年の恋の  
森-』(16)などの蜷川作品を担当。2016年は劇団☆新感線、いの  
うえ歌舞伎『黒』BLACK『乱鶯』、夏にはSHINKANSEN☆R  
『Vamp Bamboo Burn～ヴァン・パン・バーン～』が控えている。



協力：Bunkamura シアターコクーン